

Title	日本語教師に求められるコミュニケーション能力
Author(s)	黒崎, 佐仁子
Citation	聖学院大学論叢, 24(2), 2012. 3 : 1-15
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3663
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

日本語教師に求められるコミュニケーション能力

黒崎 佐仁子

The Communicative Competence Required of Japanese Language Teachers

Satoko KUROSAKI

This study examines the communicative competence required of Japanese teachers. The aim of Japanese language education is to help learners acquire communication-oriented Japanese. In other words, Japanese language learners are expected to acquire communicative competence in Japanese. However, the Agency for Cultural Affairs sets “Communication” as the center of training-course curriculums for Japanese language teachers. This paper examines descriptions in books for Japanese teacher trainees regarding the communicative competence required of Japanese language teachers, and shows that the communicative competence required of Japanese language teachers is not the same as the one required of Japanese language learners. It also points out that there is ample scope for discussion of how the communicative competence of a Japanese language teacher differs from that of a common member of Japanese society.

Key words; Japanese Language Education, Japanese Language Teachers, Communication, Communicative competence, Teacher Quality

Key words; 日本語教育, 日本語教師, コミュニケーション, コミュニケーション能力, 資質

第1章 はじめに

日本語教育において「コミュニケーション」が重視されていることは周知のことである。たとえば、日本語能力試験は、2010年から新しい日本語能力試験（新試験）として内容が改定、実施されているが、日本語能力試験公式ウェブサイトには、「POINT1 コミュニケーション能力を重視した試験です」「POINT2 レベルは5段階、自分に合ったレベルが選べます」「POINT3 尺度得点で日本語の能力を正確に測ります」「POINT4 日本語を使ってどんなことができるかがイメージしやすくなります」⁽¹⁾ という4つのポイントが掲げられており、「コミュニケーション能力」を重視した

試験であることが特に強調されている。

また、文化庁・日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議が2000年に発表した「日本語教育のための教員養成について」では、以下のように述べられ、日本語教員養成においても「コミュニケーション」を中心に置くべきだと主張されている。

日本語教育とは、広い意味で、コミュニケーションそのものであり、教授者と学習者とが固定的な関係でなく、相互に学び、教え合う実際的なコミュニケーション活動と考えられる。また、このような包括的概念としてのコミュニケーションは、今回新たに示す教育内容のすべてに共通しその根底をなすものであり、教育内容の基本となるものである⁽²⁾。

このように日本語教育では、日本語学習者にも「コミュニケーション能力」を重視した日本語能力を求める一方、日本語教員養成においても「コミュニケーション」を中心とした教育内容を提示している。

では、この日本語学習者に求める「コミュニケーション能力」と日本語教員に求める「コミュニケーション能力」とは同じものだろうか。本稿は、日本語教員養成に関連する事典、書籍、研究論文において、日本語教員に求められている「コミュニケーション能力」がどのように記述されているかをまとめ、今後議論を深めるための材料を提示することを目的とする。

第2章 日本語教育関連事典における記述

まず、日本語教員養成に関連する事典2種、『新版 日本語教育事典』および『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』にて「コミュニケーション能力」がどのように記述されているかを確認する。

第1節 『新版 日本語教育事典』

『新版 日本語教育事典』には、「日本語教育の目的が、日本語によるコミュニケーション能力の育成にあることは衆目の一致するところであるが、このコミュニケーション能力の概念規定は必ずしも同じではない。」⁽³⁾とあるが、Hymes (1972)、Canale and Swain (1980)、Canale (1983)に言及した「コミュニケーション能力」についての記述も見られる。

社会言語学者のハイムズ (Hymes 1972) は、母語話者がもっている能力のなかには、文法的に正しい文を作るだけでなく、いつ、だれに対してどのように話すのかといった言語使用の適切さに関する能力も含まれていると主張し、これをコミュニケーション能力と名付けた。(略)

1970年代以降、コミュニケーション中心の外国語教育が盛んになってきた。このアプローチは、コミュニケーションを言語の重要なはたらきであるとし、言語観と、コミュニケーション能力の育成という教育目標に基づいている。コミュニケーション能力の概念については①文法能力、②社会言語能力、③談話能力、④ストラテジー能力という4つの領域の知識と技能が含まれるというカナルとスウェイン (Canale and Swain 1980) およびカナル (Canale 1983) の説がよく引用される⁽⁴⁾。

文法能力、社会言語能力、談話能力、ストラテジー能力に関しては、「文法能力 言語を文法的に正しく理解・使用する言語能力」「社会言語能力 場面に応じて言語を適切に使用し、理解するための能力」「談話能力 単独の文を超えて意味のまとまりをもつ談話という単位における理解と産出を行う能力」「ストラテジー能力 コミュニケーション能力が十分でないとき、および実際のコミュニケーション場面の制約などによって、コミュニケーションがうまくいかなかったとき、それを修復する能力」⁽⁵⁾ であると記述されている。

Canale and Swain (1980) および Canale (1983) におけるコミュニケーション能力の違いについて簡単にまとめる。Canale and Swain (1980) は、コミュニケーション能力 (Communication competence) は、grammatical competence, sociolinguistic competence, strategic competence の3領域に分けられるとし、sociolinguistic competence については、「This component is made up of two sets of rules: sociocultural rules of use and rules of discourse.」⁽⁶⁾ と述べ2つのルールからなるとした。

Canale (1983) は、Canale and Swain (1980) における sociolinguistic competence を sociolinguistic competence と discourse competence に分け、コミュニケーション能力を grammatical competence, sociolinguistic competence, discourse competence, strategic competence の4領域にしている。つまり、『新版 日本語教育事典』では、Canale (1983) から「コミュニケーション能力」を解説していると言える。

第2節 『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』

『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』は、「コミュニケーション能力 communication competence」の項目で以下のように記述している。

言語的に正しい文を作り出すような能力だけでなく、状況に合った言語行動が可能で、しかも会話の主題や場所に適切で、相手との人間関係を良好に保てるような話し方や聞き方ができる能力をさす。この能力は、(1)「言語能力」、(2)「社会文化的能力」、(3)「方策的能力」から成ると考えられている。

言語能力：文法や用法，語彙力，発音能力などを駆使して，正しい文を作り出す能力。

社会文化的能力：社会的環境に適合したコミュニケーションを行える能力。

方策的能力：相手の意図を正しく理解し，自説を上手に展開できる能力。さらに言語能力が不足している場合，ほかの方法でそれを補う能力も含まれる⁽⁷⁾。

『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』における3能力とは，Canale and Swain (1980) における grammatical competence, sociolinguistic competence, strategic competence のことだろう。また，grammatical competence が文法能力ではなく言語能力とされているのは，佐々木 (2007) が「文法的能力 (grammatical competence)：語彙，語や文の形成，発音，つづり等の言語知識を指す。Hymes (1971, 1972)，および Paulston (1974) で「言語能力 (linguistic competence)」と言及されたものと同じものである。」⁽⁸⁾ と述べているように，Hymes (1972) などで linguistic competence という用語が用いられていたためだと考えられる。

『新版 日本語教育事典』では，社会言語能力という用語が用いられ，『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』では，社会文化的能力という用語が用いられているが，両者の違いは何か。佐々木 (2007) は，社会言語能力，社会文化能力に関し，「言語を実際の場面に応じて適切に使う能力は社会言語能力と呼ばれる。相手や場面など，言語が使われる「コンテキストによって適切に表現を使いわけ」能力である。それに対して，社会文化能力は社会・文化背景を理解し，社会の決まりごとにそって振舞ったり，コミュニケーションをする能力を指す。」⁽⁹⁾ と述べているが，これは，Canale and Swain (1980) の社会言語能力における2つのルールに相当する。ただし，『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』における社会文化的能力は，佐々木 (2007) のように社会言語能力と社会文化能力とを分けたものではなく，Canale and Swain (1980) における sociolinguistic competence を社会文化能力と訳したものであると考えられる。

また，社会言語能力，社会文化能力の定義は一様ではなく，ネウストプニー (1995) は，「だれが，どこで，何を，どう言う（聞く，書く，読む）かというルール」⁽¹⁰⁾ を用いることを「社会言語能力」と名付け，社会言語行動とは文法外のコミュニケーション行動であり，言語（文法）行動と社会言語行動が合わさってコミュニケーションが成り立つとし，更に，社会文化能力とは，「日常生活の行動，経済，政治，思想行動」⁽¹¹⁾ などを行うものであり，このような社会文化行動の中に社会言語行動および言語（文法）行動は含まれているのだという考えを提示している。

このように社会言語能力，社会文化能力に関しての捉え方にも異なりはあるが，『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』では，Canale (1983) が基になっているものと推測できる。

第3章 日本語教員養成関連書籍における記述

日本語教員に求められる「コミュニケーション能力」とは何か。日本語教師を目指すもの、または経験の浅い日本語教師を読者として想定していると思われる書籍から、日本語教師の「コミュニケーション」および「コミュニケーション能力」に関して言及しているものを取り上げる。

第1節 『日本語教師必携 ハート&テクニク』

山本(2000)は、「日本語教師のコミュニケーション学」という節を設け、「自分とのコミュニケーション」「学習者とのコミュニケーション」「他の教師とのコミュニケーション」「教室をとりまくさまざまな人とのコミュニケーション」に分けて言及している。

まず、「自分とのコミュニケーション」には、以下のような記述がある。

皆さんは自分の日本語能力やコミュニケーション能力についてどう考えていますか。最近、筆者の周りには「ちょっと問題あり」と思える人がよく見受けられます。人とうまくコミュニケーションがとれない人たちです。ある人は全く話が続けられませんが、また、ある人は自分だけが好きなことを話し、相手が聞きたいかどうかなどお構いなしです。コミュニケーションは言葉のキャッチボールだと言いますが、この人の場合、一人でカラカラ回っているような感じがします。それから、「日本語の使い方に難あり」という人もいます。例えば、人に何かわからないことを聞いた後に「そうですよねえ」。この場合、その人は常に相手から「わかっているなら聞くな!」という不要な怒りを買うことになります。

このような人たちを見ていると、「標準アクセントじゃなくて……」などのような悩みはそれほど問題ではないように思えてきます。言葉を教えようとする教師にコミュニケーション能力(伝え合う力)がないなんて、お話になりません。しかし不思議なことに、そういう日本語教師が結構いるのです⁽¹²⁾。

ここでは、「コミュニケーション能力」は「伝え合う力」と言い換えられており、「言葉のキャッチボール」ができないような言語運用能力では問題であると述べられている。

更に、「学習者とのコミュニケーション」、「他の教師とのコミュニケーション」では以下のように述べられている。

授業の休み時間や授業後の雑談で学習者とコミュニケーションをとることも大切です。(略)
学習者との信頼関係のない状態では、授業もクラスマネジメントも成立しません。いかに早

く学習者との信頼関係、学習者間の信頼関係（お互いを認め合い、受容している関係性）をつくることができるかが重要になってきます⁽¹³⁾。

私たちは何を指して日本語教育を行うのでしょうか？

……そうした理念や目的が機関の中でもきちんと共有されていて、それをよりよく実現するためにみんなで一緒にやっという雰囲気、方向性があれば、機関のあり方も変わっていくだろうと思います。(略) それにはまず、ほかの教師との関係づくりが重要になってきます。コミュニケーションを積み重ねることによって、あなたという、人となりや考え方の理解者を広げていくしかありません⁽¹⁴⁾。

「学習者とのコミュニケーション」では、学習者との信頼関係を築くためには、雑談によって学習者と「コミュニケーション」をとること大切だと述べられ、「他の教師とのコミュニケーション」では、他の教師との信頼関係を築くには、「コミュニケーション」を重ねることが必要であると述べられている。つまり、この「コミュニケーション」とは、言語運用能力を問題にしたものではなく、信頼関係を築くまでの過程を問題にしたものである。このことから、山本（2000）では、日本語教師には言語運用の能力とも言い換えられる「コミュニケーション能力」と「周囲との信頼関係を築く能力」とも言える「コミュニケーション能力」について記述されていると言える。

第2節 『生きた日本語を教えるくふう 日本語教師をめざす人へ』

佐々木（2003）では、よい日本語教師の条件として、「1. 好奇心と向上心」「2. おおらかさと明るさ」「3. 異文化に対応できる能力」「4. 話す能力」「5. 他言語に対する関心や好奇心」「6. 演技力」「7. 教材を作り出す能力」「8. 場面を考え出す能力」「9. 絵をかく才能」「10. 体力」「11. 社会文化能力」という10の条件を例とともに挙げている。このうち、「コミュニケーション能力」に関係するものとして述べられているのは、「11. 社会文化能力」であり、以下のような例が挙げられている。

ここで一人の日本語教師を紹介しよう。(略) 日本語学校の事務と、衝突を繰り返すようになったのだ。(略)

「毎朝、事務室の前を通り過ぎるのに、無言なんですよ。せめて、チラッとでもこちらを見てくればいいんですが、事務局は他人とばかりに、挨拶の声もない。(略)」

これを手始めに、次々と事務局から不満の声が出る。

「(略) 先生、木村先生は、確かに日本語もきれいだし、文法も正しいかもしれませんが、我々は何か不自然なものを感じるんですよ。ああいう方が日本語を教えるんでいいんですかね」⁽¹⁵⁾

この例に続き、この日本語教師の問題は「社会文化能力」が欠けている」(p. 183) ことだとし、その理由は以下のように記述されている。

彼女は日本語学校の一員として、ふさわしい言語や行動をとっていない。文法は正しく、音声が聞き取りやすくても、肝心の「コミュニケーション能力」に欠けている。なぜなら、その場にふさわしいことを言ったり、相手と会話する能力を自ら閉ざしてしまっているからだ⁽¹⁶⁾。

この日本語教師の問題は、「社会文化能力」であるとされているが、同時に「事務所のスタッフは教員と一緒に日本語学校を作り上げる仲間という意識がない。つまり、日本語教員に必要な価値観が欠如していることになる」(pp. 183-184) とも述べられている。つまり、山本(2000)と同様に「コミュニケーション能力」を「周囲との信頼関係を築く能力」として捉えていると言える。

第4章 社会言語能力

第1節 第二言語話者の社会言語能力

Canale and Swain (1980) は、社会言語能力 (sociolinguistic competence) を説明するために、レストランのウェ이터の例を用い、オーダーを取る際に「O. K., chump, what are you and this braod gonna eat?」⁽¹⁷⁾ と言うのは文法が正しくとも不適切であるとしている。同様の例は、『新版日本語教育事典』にも以下のように挙げられている。

たとえば、留学生が「先生、私は推薦書が必要です。私の推薦書を書くことができますか」と指導教員に言ったとする。これは、文法的にはただしい文であるが、その先生は一方的に頼まれた、おしつけがましいというような印象を受けたり、あるいは依頼だと認識できない可能性がある⁽¹⁸⁾。

日本語教員養成関連書籍である佐々木(2007)においても、以下のような例が挙げられている。

たとえば、レストランの予約をしていたが、予約の時間にレストランに行けなくなり、電話をする場合を考えてみよう。「すみません、ちょっと時間に遅れそうなんですけど……」というように、まず謝罪の言葉を述べるのがよいとされる文化圏もあるだろう。しかし、別の文化圏では、謝罪の必要はないと考え、「遅れます」とだけ言うか、あるいはそもそも連絡する必要はないと考えるかもしれない⁽¹⁹⁾。

上記の例には「第二言語話者は、自分の母語以外の言語で発話行為を行う際に、母語の語用論的ルールを転移させる」(p. 41) ことが原因で起こるものと解説が加えられている。谷口 (2001) でも、初対面の相手に年齢を尋ねるといふ例を提示し、これを「社会言語学的な失敗」⁽²⁰⁾ としている。

第2節 第二言語話者に限らない社会言語能力

中川 (2009) は「日本語教育で求められるコミュニケーション能力」に関し、国内および国外の日本語学習者、国内および国外の日本語教員、日本語教員の養成課程にいる学生、日本語教員養成課程を担当する教員を対象にアンケート調査を行っている。このアンケートでは、Canale and Swain (1980), Canale (1983) を基に「コミュニケーション能力」を文法能力、社会言語能力、談話能力、ストラテジー能力に分けた設問で、「コミュニケーション」の捉え方や認識の違いを明らかにしようとしている。アンケートの設問のうち、社会言語能力とされる設問は、「海外での居住経験」「他者に配慮した言動が取れる態度・姿勢」「国際社会の一員としての自覚を持ち、それにふさわしい行動を取る態度・姿勢」「時と場に応じて待遇表現(敬語/謙讓語)を使う能力」「異文化や習慣を理解し、不適切な言動を取らないような態度・姿勢」「多文化が共生する社会を積極的に認める態度・姿勢」「対人関係を壊すことなく維持する能力」「適切な挨拶を使用する能力」「時と場に応じてスタイル(男言葉/女言葉, 若者言葉・専門用語等)を使いわけける能力」「異文化への興味を示し、それを受容する能力」⁽²¹⁾ であり、言い換えれば、中川 (2009) はこれらを社会言語能力であると捉えていることになる。

第3章第2節で挙げた佐々木 (2003) が例示する社会文化能力に問題のある日本語教師とは、中川 (2009) の設問のうち、「他者に配慮した言動が取れる態度・姿勢」「対人関係を壊すことなく維持する能力」「適切な挨拶を使用する能力」が不足していたと言える。また、山本 (2000) が求める「周囲との信頼関係を築く能力」も「対人関係を壊すことなく維持する能力」に言い換えられる。つまり、佐々木 (2003)、山本 (2000) は、中川 (2009) の提示する社会言語能力に問題のある日本語教師を例として挙げていたと考えることができる。

第5章 談話能力

第3章第1節で取り上げた山本 (2000) が詳細に指摘する日本語教師に欠如していた言語運用能力を中川 (2009) のアンケート調査の設問に求めると、この言語運用能力は談話能力に当てはまる。中川 (2009) における談話能力の設問とは「推論したり、さまざまな情報を関連付けたりしながら言語を使う能力」「相手の発話に注意を払いながら、適当なタイミングで発話の順番を取る能力」「ことわざや格言、冗談を用いて表現を豊かにする能力」「他者と歩調を合わせながら会話を維持する能力」「人や組織と交渉(頼む、断る等)する能力」「あいづちをいったり、間をとったりして、会話

を活性化する能力」「効果的な発表・プレゼンテーションをする能力」「論理的な説得力のある話をする能力」「議論に参加し、反対意見を述べたり、同意したりする能力」(pp. 38-39)であり、山本(2000)が「全く話が続けられません」「自分だけが好きなことを話し、相手が聞きたいかどうかなどお構いなし」「一人でカラカラ回っているような感じ」(p. 35)とするのは、このうち「相手の発話に注意を払いながら、適当なタイミングで発話の順番を取る能力」「他者と歩調を合わせながら会話を維持する能力」のことであると考えられる。

つまり、山本(2000)は日本語教師に必要とされる「コミュニケーション能力」を説明するために、談話能力に問題のある教師の例を挙げ、また、よい日本語教育のあり方としては社会言語能力について言及したのである。

第6章 教師に求められる「コミュニケーション能力」

日本語教師に求められる「コミュニケーション能力」とは何かを求めるには、それが日本語教師に特に求められる能力であるのかを疑う必要がある。なぜならば、日本語教員養成課程にて「コミュニケーション」を中心に置いた教育を行い、「コミュニケーション能力」の養成を行うのであれば、日本語教師だからこそ重視し、養成されなければならない能力である必要があるからである。

『教育学研究ジャーナル』第8号には、2010年11月20日に行われた中国四国教育学会の公開シンポジウム「教師に求められるコミュニケーション能力とは何か」の報告が掲載されている。このシンポジウムは、学校教育、つまり日本という母国で日本人児童・生徒が通う学校の教育に携わる教員に向けて開かれたものであり、その趣旨は以下の通りである。

教師の資質能力の重要な柱として、コミュニケーション能力が位置していることは論をまたない。しかし教師の子ども・同僚・保護者とのコミュニケーションが困難さを抱えていること、そしてだからこそ教師のコミュニケーション能力の向上の必要性を指摘する声が増しに高まっている。つまり家庭や地域での教育力の低下、子どもたちの人間関係の希薄化が問題になる中で、教師のコミュニケーション能力のいっそうの向上が求められているのである。さて、それでは教師に求められるコミュニケーション(能力)とは何なのか。また、そのために、教員養成の段階で、あるいは研修段階でどのような方策が考えられるのだろうか。教師のコミュニケーションをめぐる問題について、対応策自体の問題を含めて、その現状と課題について明らかにしていきたい⁽²²⁾。

このような趣旨でシンポジウムが行われていることから、日本語教師に限らず、教師一般に「コミュニケーション能力」が強く求められていることが分かる。

また、教員養成へと目を向ければ、教育職員養成審議会が1997年7月に「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第1次答申）」に「コミュニケーション能力」に関する記述がある。ここでは、「教員に求められる資質能力」が「1. いつの時代も教員に求められる資質能力」「2. 今後特に教員に求められる具体的資質能力」「3. 得意分野を持つ個性豊かな教員の必要性」に分けて提示されており、「2. 今後特に教員に求められる具体的資質能力」は、更に「地球的視野に立って行動するための資質能力」「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」「教員の職務から必然的に求められる資質能力」の3つに分けられている。「コミュニケーション能力」は、このうち「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」に含まれている。

変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力⁽²³⁾

課題解決能力等に関わるもの

例：個性、感性、創造力、応用力、論理的思考力、課題解決能力、継続的な自己教育力
人間関係に関わるもの

例：社会性、対人関係能力、コミュニケーション能力、ネットワーキング能力

社会の変化に適応するための知識及び技能

例：自己表現能力（外国語のコミュニケーション能力を含む。）、メディア・リテラシー、
基礎的なコンピュータ活用能力

ここで注目したいのは、「コミュニケーション能力」が「人間関係に関わるもの」と「社会変化に適応するための知識及び技能」で取り上げられている点である。まず、前者は、社会性や対人関係能力と並べられており、これは「対人関係を壊すことなく維持する能力」であると考えられ、社会言語能力（あるいは社会文化能力）であると言える。また、後者は、自己表現能力に括弧書きで付け加えられたものであり、「外国語のコミュニケーション能力を含む」として記述されている。つまり、「コミュニケーション能力」と「外国語のコミュニケーション能力」とは、違うものとして扱われているのである。

Canale and Swain (1980) が第二言語教育の観点から、「コミュニケーション能力」を4領域に分けたことを振り返れば、この「外国語のコミュニケーション能力」とは、文法能力、ストラテジー能力、社会言語能力、談話能力から成り立っていることになるが、この答申で「コミュニケーション能力」と「外国語のコミュニケーション能力」を分けていることに注目すると、この答申においては外国語のコミュニケーション能力を含む自己表現能力とは、言語運用の面に焦点が当たったコミュニケーションであると考えられる。これに対して、言語運用の面に焦点が当てられない場合、「コミュニケーション能力」は「人間関係に関わるもの」つまり、「周囲との信頼関係を築く能力」として捉えられていることになり、「コミュニケーション能力」が社会言語能力（あるいは社会文化

能力)であるならば、「自己表現能力」や「外国語のコミュニケーション能力」とは、文法能力、ストラテジー能力、談話能力であるとも捉えられる。言い換えれば、学校教員の教員養成課程における「コミュニケーション能力」という用語は、言語運用の面に焦点が当てられていないものであるということになる。

第7章 社会人に求められるコミュニケーション能力

文部科学省は、2010年5月に「コミュニケーション教育推進会議」を設置しているが、この第1回会議では、別紙資料⁽²⁴⁾として「(社)日本経済団体連合会新卒採用(2010年3月卒業者)に関するアンケート調査結果(平成22年4月)」を提出している。これは、新入社員の選考に当たって重視した点を25項目から5つを選択するという無記名式アンケートであり、425社から回答を得ている。その結果では2010年の1位は「コミュニケーション能力」で81.6%であり、2位の「主体性」60.6%を大きく引き離している。また、「コミュニケーション能力」は2004年から2010年まで7年連続で1位となっている。

更に、中央教育審議会が2011年1月にまとめた「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」では、「こども・若者の変化」として次のように述べられている。

子ども・若者については、働くことへの関心・意欲・態度、目的意識、責任感、意志等の未熟さや、コミュニケーション能力、対人関係能力、基本的マナー等、職業人としての基本的な能力の低下、職業意識・職業観の未熟さなどが多く指摘されている⁽²⁵⁾。

このように、職種および業種と問わず、就業には「コミュニケーション能力」が必要だと考えられている。読者に就職活動予定者を想定し、企業の人事部長にインタビューをした森(2009)にも、「まずはチームとの協調性やコミュニケーションが求められる」⁽²⁶⁾、「部内、営業、仕入、外部と、それぞれ納得してもらい、共感してもらわないと進められない。その意味で、真のコミュニケーション力が必要とされるし、健全な根回し力、健全な仲間作りが求められる」⁽²⁷⁾のような発言が記述されており、就職活動を行って社会人になるためには「コミュニケーション能力」が必要とされることは広く一般に認識されていると言える。また、「チーム」や「仲間」という語とともに、用いられていることから、「コミュニケーション能力」は、「周囲との信頼関係を築く能力」とであると認識されていると考えられ、言い換えると、日本語教師であれ、学校教員であれ、社会人には、人間関係に関わる「コミュニケーション能力」という名の「周囲との信頼関係を築く能力」が必要であると捉えられる。

第8章 日本語教師の資質

平畑（2009）は海外での日本語教育経験を持つ日本人日本語教師を対象に質問紙調査を行い、海外で活動する日本語教師に求められる資質をまとめている。この質問紙調査は、60項目からなり、「コミュニケーション」について言及した項目には「コミュニケーション力（同僚をはじめ、現地のいろいろな人といろいろな場面で心を開いて親しく付き合い、日本人だけで群れない）」⁽²⁸⁾がある。設問60項目は、「意欲」「人間性」「教育能力」「コーディネート能力」「国際感覚」「日本人性」の6因子に分けられているが、このうち、「コミュニケーション力」は人間性に分類されている。人間性の下位項目には、「コミュニケーション力」のほかに、「誠実さ」「つきあい方の公平さ」「学習者との交流」「熱心さ」「現地の文化・価値観の理解と受容」「謙虚さ」「現地の利益を重視する姿勢」「学習者の学びに従う姿勢」がある。「コミュニケーション力」を「人間性」に分類していることや「人間性」に分類されているその他の項目と照らし合わせると、平畑（2009）は、この「コミュニケーション力」を「言語運用能力」と捉えていないと言える。

嶋田（2008）は、日本語学校で教師に求める資質・能力を「日本語運用能力」「実技能力」「人間力」とし、「人間力」について次のように述べている。

- ・考え方・物事の対応が柔軟であること
- ・他者への配慮ができる感受性を持っていること
- ・異なる価値観を受け入れる包容力があること
- ・責任感を持って物事に当たる力があること
- ・相互理解のもと協働を進める能力があること
- ・困難な状況において誠実に対処することができること
- ・意欲と情熱をもって仕事に当たることができること⁽²⁹⁾

平畑（2009）は「コミュニケーション力」を「同僚をはじめ、現地のいろいろな人といろいろな場面で心を開いて親しく付き合い、日本人だけで群れない」（p. 28）ことだとしているが、これは、嶋田（2008）の「考え方・物事の対応が柔軟であること」「他者への配慮ができる感受性を持っていること」「異なる価値観を受け入れる包容力があること」「相互理解のもと協働を進める能力があること」を同僚をはじめとする現地のいろいろな人と行えることであるとも捉えられる。

また、嶋田（2008）は日本語教師に求める「日本語運用能力」を以下のように列挙している。

- ・簡潔・的確・平明に自分の言いたいことを表現する能力

- ・場や人間関係に対して適切な語彙や表現を使う能力
- ・相手から目的に応じた情報を聞き出す能力
- ・相手が伝えたいことを正しく聞き取る能力
- ・相手の発話に対して的確に応じて表現する能力⁽³⁰⁾

これは、中川（2009）の談話能力の設問と類似している。また、「簡潔・的確・平明に自分の言いたいことを表現する能力」とあるが、これは、「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第1次答申）」で、自己表現能力とされているものと重なる。

以上のことから、日本語教師に求められる「コミュニケーション能力」は、同時に学校教育職員に求められているものであり、更に社会人一般に求められているものであるとも言える。そして、そのような日本語教師に求められる「コミュニケーション能力」は、「日本語運用能力」と「人間力」に分けることができ、日本語教育の教育者や研究者によっては、「コミュニケーション能力」を「人間力」に含まれるものであるとしている。

第9章 おわりに

日本語教員に求められている「コミュニケーション能力」とは何か。複数の日本語教員養成関連書籍等における記述を比較し、何を「コミュニケーション能力」とするかは教育者、研究者によって異なることが分かった。しかし、「周囲との信頼関係を築く能力」を「コミュニケーション能力」としている点は共通しており、異なっているのは、談話能力または日本語運用能力と名付けられている能力を「コミュニケーション能力」に含めるか否かという点であった。また、この「周囲との信頼関係を築く能力」は、日本語教師だけに求められているのではなく、社会人一般に求められているものである。

では、日本語教師という職業に特に求められる「コミュニケーション能力」とは何か。「日本語教育のための教員養成について」では、日本語教員養成では「コミュニケーション」を中心に置くべきだとされているが、社会人一般にとって「コミュニケーション」は中心に置かれるべきものであると主張されてしまえば、日本語教員養成の核が崩れることになる。今後、より良い日本語教育のあり方を模索し、よい日本語教員養成のあり方を追求するためには、社会人一般にとって必要な「コミュニケーション能力」を問うのではなく、日本語教師に特に求められる「コミュニケーション能力」とは何かを議論していく必要があるだろう。

本稿では、日本語教師の資質や日本語教員養成に関わる「コミュニケーション能力」に対し、再考し議論を進める必要があることを指摘することしかできなかった。日本語教師に求められる「コミュニケーション能力」とは何かという議論は今後の課題としたい。

注

- (1) 国際交流基金・日本国際教育支援協会「日本語能力試験公式ウェブサイト」(<http://www.jlpt.jp/index.html>)〈2011.11.9 確認〉
- (2) 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議「日本語教育のための教員養成について」(http://www.bunka.go.jp/file_1/1000010839_materials.pdf)〈2011.11.9 確認〉
- (3) 細川英雄「総合学習としての日本語教育」『新版 日本語教育事典』2005年10月 大修館書店 p. 518
- (4) 谷口すみ子「言語能力」『新版 日本語教育事典』2005年10月 大修館書店 p. 695
- (5) 谷口すみ子 前掲書 p. 695
- (6) Canale, M. and Swain, M., "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing". *Applied Linguistics*, 1, 1980, p. 30.
- (7) 高見澤孟「教授法」『新・はじめての日本語教育』第1章 2004年3月 アスク出版 p. 9
- (8) 佐々木ゆり「「コミュニケーション能力」を考える ―日本が目指すこれからの英語教育と変わりゆく指導者の役割―」『宮城教育大学紀要』第42巻 宮城教育大学 2007年 p. 139
- (9) 佐々木泰子「言語使用と社会」『ベーシック日本語教育』第6章 ひつじ書房 2007年4月 p. 41
- (10) J. V. ネウストプニー『新しい日本語教育のために』大修館書店 1995年6月 p. 41
- (11) J. V. ネウストプニー 前掲書 p. 42
- (12) 山本京子「日本語教師のコミュニケーション学」『日本語教師必携 ハート&テクニック』第1章 第2節 アルク 2000年10月 p. 35
- (13) 山本京子 前掲書 pp. 39-40
- (14) 山本京子 前掲書 p. 46
- (15) 佐々木瑞枝『生きた日本語を教えるくふう 日本語教師をめざす人へ』小学館 2003年11月 p. 183
- (16) 佐々木瑞枝 前掲書 p. 183
- (17) Canale, M. and Swain, M., "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing". *Applied Linguistics*, 1, 1980, p. 30.
- (18) 武川加奈子「発話行為」『新版 日本語教育事典』2005年10月 大修館書店 pp. 481-482
- (19) 佐々木泰子「言語使用と社会」『ベーシック日本語教育』第6章 ひつじ書房 2007年4月 p. 41
- (20) 谷口すみ子「日本語能力とは何か」『日本語教育学を学ぶ人のために』第1章 世界思想社 2001年9月 p. 22
- (21) 中川良雄「日本語教育で求められる日本語コミュニケーション能力」『「求められる日本語教員に日本語教員養成はどう応えるか」に関する総合的研究』平成18年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究(B) (課題番号: 18320084) 研究成果報告書 2009年3月
- (22) 櫻井佳樹「教師に求められるコミュニケーション能力とは何か」『教育研究ジャーナル』第8号 2011年 p. 71
- (23) 教育課程審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について(教育職員養成審議会・第1次答申)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/yousei/toushin/970703.htm)〈2011.11.9 確認〉
- (24) コミュニケーション推進教育推進会議(第1回)資料6「「コミュニケーション能力」に関する指摘・調査等」2010年5月(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/075/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2010/06/22/1294462_03.pdf)〈2011.11.16 確認〉
- (25) 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」2011年1月(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)〈2011.11.9 確認〉
- (26) 森健『就活って何だ』2009年9月 p. 19 JR 東海 取締役・人事部長へのインタビュー

- (27) 森健 前掲書 p. 189 バンダイ 取締役・管理政策担当へのインタビュー
- (28) 平畑奈美「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化—海外教育経験を持つ日本人日本語教師への質問し調査から」『早稲田大学日本語教育学』第5号 早稲田大学日本語教育学会 2009年5月 p. 28
- (29) 嶋田和子『目指せ、日本語教師力アップ!—OPIでいきいき授業—』ひつじ書房 2008年9月 p. 20
- (30) 嶋田和子 前掲書 p. 17

参考文献

- 櫻井佳樹「教師に求められるコミュニケーション能力とは何か」『教育研究ジャーナル』第8号 2011年 pp. 71-74
- 佐々木瑞枝『生きた日本語を教えるくふう 日本語教師をめざす人へ』小学館 2003年11月
- 佐々木泰子「言語使用と社会」『ベーシック日本語教育』第6章 ひつじ書房 2007年4月 pp. 36-44
- 佐々木ゆり「『コミュニケーション能力』を考える—日本が目指すこれからの英語教育と変わりゆく指導者の役割—」『宮城教育大学紀要』第42巻 宮城教育大学 2007年 pp. 137-144
- 嶋田和子『目指せ、日本語教師力アップ!—OPIでいきいき授業—』ひつじ書房 2008年9月
- 高見澤孟『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』高見澤孟(監修) 高見澤孟・伊藤博文・ハント 蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子 アスク出版 2004年3月
- 谷口すみ子「日本語能力とは何か」『日本語教育学を学ぶ人のために』青木直子・尾崎明人・土岐哲(編) 第1章 世界思想社 2001年9月 pp. 18-33
- 中川良雄「日本語教育で求められる日本語コミュニケーション能力」『求められる日本語教員に日本語教員養成はどう応えるか』に関する総合的研究』平成18年度~平成20年度科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号:18320084) 研究成果報告書 pp. 11-37 2009年3月
- 日本語教育学会(編)『新版 日本語教育事典』大修館書店 2005年10月
- ネウストプニー, J. V.『新しい日本語教育のために』大修館書店 1995年6月
- 平畑奈美「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化—海外教育経験を持つ日本人日本語教師への質問し調査から」『早稲田大学日本語教育学』第5号 2009年5月 pp. 15-29
- 森健『就活って何だ』文春新書 2009年9月
- 山本京子「日本語教師のコミュニケーション学」春原憲一郎, 山本京子, 遠藤藍子, 松本隆『日本語教師必携 ハート&テクニック』第1章 第2節 アルク 2000年10月
- Canale, M. "From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy" In J. Richards and R. Schmidt (eds.) *Language and Communication*, Longman, 1983, pp. 2-27.
- Canale, M. and Swain, M. "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing". *Applied Linguistics*, 1, 1980, pp. 1-47.
- Hymes, D. H. "On Communicative Competence" In J. B. Pride and J. Holmes (eds), *Sociolinguistics*, Penguin, 1972, pp. 269-293
- Paulston, C. B. "Linguistic and communicative competence" *TESOL Quarterly*, 8, 1974, pp. 347-362.